
カフェ・グリュック

涼宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カフェ・グリュック

【Zコード】

N3164D

【作者名】

涼宮

【あらすじ】

世界でも64人しかこの持病を持つていないと言われる『熱中症症候群』を持つている相川春日 アイカワカスガ。熱中症で倒れているところをイケメンの井上さんに助けてもらい、その恩返しをする為に井上 イノウエ さんと同じバイト先に勤めることにした春日のハッピーラブラブ（？）バイトライフが始まりますッ

第1話（前書き）

初心者で未熟者なので、読みにくかったりもしかして承けて頂いてから、
お読み下さい。

第1話

バタツ。スッテーン！

はあ・・・まだだ。いー加減治つてくんないかな、熱中症症候群。
一億人に一人という割合でなるという奇妙な持病。
つまり日本中でアタシしか、この持病を持つていないと
いう事。一億人に一人だから、世界でも六十四人しかこの持病を持つていないと
つて計算になるね。

でも、あの日あなたに会つて、熱中症症候群を持つて良かつたつ
て思えた。（ちょっとゲンキンだけどね）

だって、もし熱中症症候群を持つてなかつたら、あの日あなたがア
タシを助けてくれなかつただろうから。あなたと会えなかつただろ
うから。

だから、きっと今日もあなたはアタシを見つけて助けてくれる。さ
て、じゃあ、あなたがアタシを助けてくれるまで今までのこと、思
い出してみようかな
・・・。

あー寒い！あなたと出会えたのも、こんな寒い冬の日だったよね・・

熱中症 バイトライフ

「ふわああ・・。ん～～眠い！ついでに寒い！サムネムい！」今田は学校の始業式。つまり冬休み明けってことだね。今日は寒いけど、曇りだから熱中症になる心配は無いね！こーゆー時、うれしーんだか哀しーんだか分かんなくなる。ま、ぶっちゃけどっちでもイイんだけどね！！（開き直り）

ヤツベ!! 急げ!! ダツと走り出した。アレ? なんか暑くなつてきマシタよ? 上を見る。カツ!! と日光が降り注いだ。あ、そうそう。言い忘れてたけど、アタシ『相川 春日 アイカワ・カスガ』。

話に戻るけど、その日光を浴びた瞬間、アタシはクラッとした眩めまいがして、そのままバタッと倒れた。

「ん・・・アレ? ここつて・・・」「おい。起きたかよ」低い声音が上から聞こえた。目を開けると、二十歳くらいの男の人が春日の目の前にいた。

「え、あ、はい。え？・・・えーと・・あなたが、助けて下さった
んですか？」その男は少し困惑のよつて春日から田を逸りし、呟く
ように「・・・ああ・・・・・」と呟いた。

「スッ、スマセン！ホントにありがとうございます！」
それでえ・・・ここは、一体？」「ああ、ここは『 』 グリ
ユック』つつ一喫茶店だ。俺の勤め先。名前くらい、聞いた事ね
ーか？」春日は正直に言った。「あ、知りません。てゆーか、聞い
た事も無いですね」「ああ、そーかよ。しかし、こりやまたスッ
パリ言つてくれたモンだな。もうちつとオブラーートに包んでもいい
んじやねーのか？」「えッ！ス、スマセン！」「・・・別に
いーケドよ・・。で？具合はどうだ？良くなつたか？」春日の額に
手の平を当てながら、男はそう言つた。

「へつ、ダッヂダイジヨーブですナビ・・・・・!/?/／／／／(ナッ)
なんかハズい・・・)」「?・・・そーか。ならいい。・・おい」「!/?えつ!-!/?な、何ですかッ!?」「
「ケーキ。食つてくか?食つてつた方が帰り道、倒れねーだろ」「
はあ・・・あの、お気持ちは嬉しいんですが・・・お、「お?・
「お金を持ってなくて・・・つー・・・」

「・・・・・」「・・・・」一人の間に沈黙が流れた。（・・・あーあ、絶対「それを早く言えッ！－！」とか「・・・ならダメだな」とか言われるだろーなあ・・・）

沈黙を破つたのは、その男の方だつた。「……だから?」「え・・?」「だから何なんだよ。金がねえから、食えねえとでも言つつもりか?」「へ?え、あの」「俺は」春田の言葉を遮つて、その男はこう言つた。

「俺は、お前に、帰り道倒れねえよーにケーキ食つてけつつつたんだよ。誰も金の話なんてしてねーだろ。金よこせ、なんて一言も言つてねーだろが。オラ、早く何にすつか決める」「は、はい。え、えーと・・では、レアチーズケーキを・・」「ん。じゃ、あつちの席に座つて待つて。ああ、でも無理なひにこいてもいーぞ」

「あ、じゃあ、ひにこさせて頂きます。すみません・・・つ」「謝る」とじやねえよ。無理されても、こっちが困るだけだ。だから、まあ・・・無理すんなよ」「あ、ありがとひ」「わこます・・・」

それから少ししてから、その男が来た。「お待たせシマシタ。レアチーズケーキです。」ひむくじでーぞ「無愛想に」口つともせず、言つて春田の前に差し出した。

「あ、スンマセン。ありがとひ」「わこます」そのレアチーズケーキはおいしそうで思わず「わあ・・・」と口から漏らしてしまつた。「はつ!す、すいません!でも・・・本当におこしそうです。イエ!おこしいんですよね!ウン!」「・・・」チラと男の顔を見ると驚いた顔をしていて、一瞬だけつと柔らかく微笑んだ。

「・・・!」思わずドキッとしてしまつ程の端整な顔に見惚れた。「・・・お!」食わねーのかよ。わつと食え」「くつ!・・・あ、はい!」パクッと一口、口に含んだ瞬間、自然と笑みが零れた。

「・・・おこしこですか?」「ん、あなたが作ったんですか?」「

ん？あ、ああ・・・そうだが」「つづわあ・・・・・スッゴイですね！アタシはこんなのは絶対作れませんよーほんと、スゴイ・・・・・・・」「あつ、そーいえば、あのぉ、まだ教えてもらつてませんよね」「・・・何を」「あなたの名前」「名を聞く前に、まず名乗れ」鶴の一声のように言われ、しぶしぶ名乗つた。「あ、相川 春田 アイカワ カスガ です・・・」「・・・俺は井上・・・・・・・だ」「??井上さん、ですか？」「あ、ああ。そうだ」「そうですか・・・えつと、じやあ井上さん！…」「ん」「あ、明日も・・・つ、来ていーですかつ！?」「・・・こんな」「えええ！…?（ガーン！…）」

それから一息吐いて、控えめに笑いながら「バイト。すんなら来てもいいけど、な。つーか、しろ。人手足らねえから」「め、命令形ですか・・・。でも、こんなステキなお店ならバイト、したいです！…」「・・・そりや Bieber 「これからよろしくお願ひします！…」「ああ・・・ああ、それと、相川！」「?ハイ？何でしょ？?」「

「・・・明日から、八時に集合だ。遅刻すんなよ」「・・・・・!・・・はい！」ニシ口に笑つて春田は返事をした。

これから、アタシの、ハッピーラブラブ（?）ライフ・・・はじまりはじまり

第1話（後書き）

いかがでした？ よりしければ感想などもお書きください！
あの、ホントに出来たらでいいんで・・・。

第2話（前書き）

「前回までのあらすじ」

熱中症症候群の春日はカフュ・グリュックでバイトをすることに。
大魔王の井上さん、王子キャラの芹田さん、変人色男の糸くん、美少年の依倖くんと一緒に今日もバイト！

そこに、春日と依倅くんの友達、すつちーこと鈴地優くんから一人に頼みが・・・？

なんと、すつちーの妹と弟のさくらちゃんと翔ちゃんが誰かにさらわれたって！？成り行きですつちーを助けることに。

だが、この事件には恐るべき謎が・・・！？

春日のハッピーラブラブ（？）バイトライフ、待望の第二話！

「おっしゃりいりぞーこまーす！！！」

みなさん、こんにちはー相川 春日 アイカワ カスガ でっす！
今日も、ハッピーバイトライフを楽しみたいと思つておりますッ。

『じゅうくつビーフ』

熱中症 バイトライフ

「オウ」「アレッ、井上さんーおはよーいぞれこます。早いですねー」「ああ。・・・ケーキの下準備があるからな」「あ、そうですよねー！井上さんがケーキ作ってるんですモンね！」「お前な・・・いーかげん覚えろよ。何回朝同じ質問して同じ答え返されると思つてんだ・・・ッ」「スッ、スンマセン・・・・ーー（あわわわ・・・。マ、マジで魔王だよ、この人。魔王・・・）「何か言つたか」「イエ、何も？」

と、まあ・・・こんなカンジで毎日営業しております。あ、そういうーあと、3人他に働いてる人がいるんです。（ちなみに、この魔王の人は『井上さん』です。下の名前は知りません。今度追求してみようと思います（）

ガラツと事務所のドアが開いて、178cmの男が現れた。

「井上さん。ケーキのスポンジ、焼けましたよ。冷やしておきますね。おや、春田さん。おはようございます。いつも遅刻せず偉いですね」と、穏やかな敬語口調で話しているのは、『芹田 朱鷺セリタ トキ』さん。身長は井上より6cm低いです。ケーキを作る方の仕事をしてゐるんです。たまに接客もしてくれます。

「イエイエ、誇れる程のことじや無いですよ」「サンキューな、芹田。悪いな、いつも」「いえ、僕は好きでやらせて頑いでいるので。・。逆に感謝したいくらいです。あ、そうそう。春田さん」

いきなり春田の方を見て、ニッコリ笑つた。「コレ、エプロンです。どうだ」「へつ、あつ、スンマセン！…あやーす！…」「芸人か」バシッと井上が春田の頭をはたいた。

「ふふつ、では僕は奥で仕事をしているので、何かあつたら何でもお申し付け下さい」そういうつてまた事務所の中に入つていった。

キイ、カラソと店のドアが開き、もう一人の男が入ってきた。

「おっはよー」『ゼロ』「まーす。あ、春田だ」「おっすー 粋くん！」
「おっ、粋」「井上さんには言つてませんケド。」「お前、殴られてーのか。しかも「には」つて何だ、「には」つて

この井上さんに対しても、ちょっとといい印象を持つていらない変人少年は『沖田 粋 オキタ スイ』くん。変人だけど、スゴイ色男です。身長は173cmくらい。なんと名門の高校でいつも学年トップなんですってー。この外見からは全然想像付できませんよね（悪気なし）。

もう一度、カラソと音がして店のドアが開いた。

「あつ、いらつしゃいませーー。って、なーんだ。依倖くんか」「なんだつてなんだ！失礼だな」「『めん、『めん。ホラ、エプロン着てきちゃいなよ」「言われなくともそうするつもりだ」「んじゃ早くねーー。」

もつも来たのは『近藤 依倅 コンドウ イサチ』くん。背は160cmです。男の子にしては背が小さいけど、スッゴイ美少年なんです！！一見、ボーイッシュな女の子と思っちゃうくらいです。ウイッグを付けるとホントに女の子になっちゃいます。

キイ、カランカラン

ガラツ。

「あ、依倖くんつ。ほら見て見てーーーすっちーだよーーー」「ん?
おお、鈴地!久しぶりだな。いらっしゃいませ」「おお。近藤もコ
コでバイトしてんだな。いやあ、友達がバイトしてると「なんて初
めて見たぜ」

「え？ でもお前もバイトしているんだろ？」「依僕が言った。」

「うん。おんな・・・。母子家庭の長男だし、お袋も家族の為にがんばってパートやつてくれてるしな。妹と弟にも贅沢させてやりてえし」「鈴地・・・」「すいちゃー・・・」

「「ガンバレ。」」「ハートが無え！！」「アハハ。冗談だつて。でも、ホントがんばつて！すつちー」「働け」ゴン、と鈍い音がし

て春日の脳天に井上の拳がクリーンヒットした。

「いつたーッ！！何すんですかッ、井上さん…痛いじゃないです！」「いつまでも、客とクッチャべってんじゃねえ！！しゃべんなら、バイト終わってからにしろ」

「ただのお客さんじゃありませんッ。ア・タ・シ・の友達ですッ！」「友達といふ名の客だる」「違いますう！！大体何ですか、その「友達といふ名の客」って…そんな具体的な名前のお客さんなんていませんよ…！いたら逆にこっちが哀しくなってきますよ！」

「冗談に決まつてんだろ。それくらい分かれ。バカ」「バツ、バカつて何ですか！？それにそこまで言うんなら、依倖くんだってスッゴイしゃべってたじやないですか！依倅くんにもゲンコして下さいよ…！」依倅はしゃべってたが、仕事もしてたぞ。お前も依倅を見習え「へッ、ばーか。ざまーみろ、春日」「うつさいよ…！依倅くん！」

それから春日と依倅は真面目に働いた。

「ふう。そろそろ閉店ですね。お疲れさまでしたーッ！！」「お疲れ」「お疲れッした」「お疲れさま」「お疲れ様でした」

店を出ると、先程店に来ていた鈴地優　スズチ・スグル　がいた。「あれッ、すっちー…どしたの…？も「閉店だよ？」「アッ！！相川！スマン、助けてくれッッ！！」「ええッ…？ど、どうしたの…！」

！？あつ、依倖くん！大変、大変！…」「！？な、何がどーしたツ
！？」

その後数十分、鈴地は春日と依倖に訳を話した。

鈴地の話によると、グリュックを出た後、家に帰ると母が倒れており置手紙で『弟と妹を返して欲しければ、バイトを辞めて交番前の公園に来い』と書かれていたそうだ。もちろんバイトを辞めるワケにはいかず、かと言つて弟と妹を見捨てる事もできるはずが無かつた。そこで、春日と依倖を頼つてきた、というのだ。

「そつ、それは大変だよ！…スグに警察に行かなきや…・・・ツ！…」
「いや、警察には行けねえ…」「何故だツ！…これは立派な誘拐事件だぞツ！…？それにお前の母上が倒れていたのも、ソイツが関係している可能性もあるんだぞ？…それなのに、警察に行かないでどうするツ！…」「そうだよ！もうアタシ達には手に負えない事になつてゐかもしれないんだよ！…」

「…それは、分かつてゐる。けど、置手紙に『交番前の公園に来い』つ書いてあつたんだ。これはつまり、完全に警察をナメてる…。『警察に行つてもムダだ』つて言つてるようなモンじやねーか…ツ？

「そ、そーなのツ？…じゃあ…アタシ達で何とか二人を助け出すしかない、ね…」「ああ。だが、俺達子供だけで行つても…」
「おい」「…」「え？」「…」

3人とは違つ声が混ざつた。

「依僕の言つ通り、子供だけで行くのは危険だ。それに、ウチのバイトが危険に飛び込んでくのを見逃したら、責任問題になりそうだからな。付いてつてやるよ」「僕もぜひ」一緒にさせて頂きたいですね。おもしろそうですから。ただ、くれぐれも無茶はしないで下さいね」

「井上さん・・芹田さん・・・」「面田あつません。恩にきります。・・・」「す・・すいません!・・ありがとうございます!・・・」「によーしー!・・・じゃあ皆でレッツゴー!・・・」

みんなで公園に行こうとした、その時。「あれ　　ツ?おにいやん、どうしたの?こんなところでー」「あつ!ホントだ!にーちゃん!ーなんでココにいんのー!?」「　　・・・え?」「　　」

「

「さくら・・・ツ!・?翔・・!?」「え・・な、なんで!・?だ、だつて!一人はさらわれて、置手紙も・・」「「でがみ??.」「や、そうだよーお前ら!や、なんでココにいんだ!・?公園にいるんじやなかつたのか!?」「あー!・!それはね、おかーさんと『ゆーかいじけん』!」やつてたからーおかーさんがおまわりさんで、おそれとさくらが、ひがいしゃ!..」「じゃ、じゃあ、犯人は!?」「え、はんにん?あ、そうだった!・?ようちやん、わたしたち、はんにんさんをきめるために!・?えんにいつたんだよーわすれてた!..」「あー、そーだつた!」

「え、じゃあ、だから『弟と妹を返して欲しければ、交番前の公園に来い』って書いたの?」「「つん……」」「あ・・・そういえば・・・」

・

鈴地がなにかを思い出した。「どうかしたの?すつちー」「文字、全部ひらがなだつた・・・」「「え・・・」

とこり」と、この『やくひらがやん・翔ちゃん誘拐事件』はひつそりと幕を閉じた。

また、その後の二人の話によると、鈴地の母が倒れていたのは、『警官が拳銃で撃たれた』という設定だからだそうだ。そして、疲労のあまりそのまま寝てしまつた、といつことだつた。

「へえ　え。そんなことがあつたんだー。みんなズルいなあ。楽しくしちゃつてさ・・・」「何言つてんの！大変だつたんだからね！ホントに最初はビックリしちゃつたよつ。ねえ？依倖くんツ」「あ。全くだ。毎回あの兄弟には困らされるな・・・」「そうですねえ・・・。でも、たまにはああいうのもいいと思いますよ？僕は少し楽しかつたんですけどね」「井上さんは、どうでしたツ？」「ハツ・・・あんなの疲労蓄積以外の何物でもねーだろツ」「・・・それもそうですねー・・・」

でも、アタシはその時、まだ気が付かませんでした。井上さんと井
田さんの様子が少しおかしい事に・・・。

そしてついで、あの忘れない出来事が起ってしまったのです。

第2話（後書き）

いかがでしたか？！...ここまで読んで下さりて、ありがとうございます！
では、また！Special Thanks!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3164d/>

カフェ・グリュック

2010年12月23日14時28分発行